

# 塩尻の文学

## 第6号

(ミステリー)

梶龍雄・斎藤栄・峰隆一郎・  
津村秀介・草川隆・西村京太郎

塩尻が舞台になっている文学作品を紹介します。  
美しい塩尻を見つめてみましょう。

2008年12月12日発行



Akahiko



Kishiko



Masumi



Bokusui



Shiki



Utsubo



# 淡雪の木曾路殺人事件

梶 龍雄

女子大生奈都子と千鶴は知人の紹介で冬の木曾路を訪れる。宿泊先が資産家の家というのが、興味を引いた。ところが、旅に関わった人々が次々と亡くなっていく……

奈良井の町にも、スーパーマーケットがある。もちろん鄙びて、小さなものだ。それでも、その中に入ると、ばかに照明が爽やかに明るく思えた。その下にあるさまざまな商品ラベルの通俗な色も、なんだか爽やかに目と心に沁みる。そして、どんな食べ物も、魅力的だ。

なんでもが楽しくてしかたない子供時代に返ったような気持ちで、これから一週間あまりの副食品と、身のまわりの消耗品を買って、外に出た。

奈良井の町筋は、暖かな陽射しの下に静まり返っていた。

いい町だ。昔の街道の面影を残しているというだけのことではない。木曾路の他の宿場と違って、この町には、長い歴史の中をひっそりと、しかし中断なく生きて来たという、人間の暖かな息づかいが感じられるからだ。（中略）

一時少し過ぎ、私たちは軽い昼食のために、街道の中ほどにもどって昔ながらの町家をかかなり巧みに改造した“つちや”という和風喫茶店に入った。板大戸の中にしつらえた潜り戸を入ると、まっすぐに通り土間があり、横手に一列に三つの部屋が並んでいる。この街道あたりの典型的な建物だ。

表に面した店の間の次の、いろりのある勝手の間が、喫茶店としてのメインの吹き抜けの部屋で、土間もそこで、一応、洋風なドアで区切られている。

入って靴を脱ぎ、畳の上にあがる。

土間の先は勝手の間長さいっぱい、カウンターと調理場になっている。（中略）

街道の古い家並のたたずまいが、うっすらと雪の色で、ひと刷毛の化粧をしている風景は悪くなかった。

こんな街道でも、車の通りだけは間断をつけてけっこうあるから、今日のわずかばかりの雪では、大通りには積もりようもなかった。

でも、脇に入る道を見ると、うっすらと白の絨毯が敷かれていた。積雪にしたら、一センチ少しのものか…

猿頭の軒の先端に小さく盛り上がる雪、檜皮葺の板壁に点てんとへばりついている雪、針葉樹の上部に笠を作る雪…。雪の神は自然のたたずまいのディテールを細かに拾って、繊細な形の彩色をほどこしていた。（中略）

梶龍雄  
推理作家・翻訳家。岐阜県生まれ。（1928-1990）  
慶應義塾大学文学部卒業。





# 信濃路殺人事件

斎藤 栄

東京上野の森、国立彫刻美術館にひとつの黒い影があらわれた。彫刻界第一人者、志賀一清の作品〈恋する若者達〉〈飛翔〉〈四人の輪〉は、その影によって致命的な打撃を受けてしまう。作品のモデルは、白柳弥生と妹の友佳理だった。

白柳家が経営するホテルが、塩尻市北小野勝弦にオープンした。捜査を担当する牧警部の婚約者、智子は弥生の同級生だった。内情を知るため、智子は弥生に会いに行くが、新婚旅行には勝弦のホテルで宿泊するようすすめられる・・・

---

白柳のオープンする予定のホテルは、長野県の塩嶺王城県立公園に隣接する部分にあった。そこは、信濃路の中でも、もっとも風情のある面影を伝えた一角でだった。更に、高原の別荘地やカントリークラブとも近接し、勝弦峠までくれば、はるか眼下に諏訪湖を見おろす景勝の地なのである。

友佳理は、父の仕事を手伝うために、生まれて初めて岡谷に下車。タクシーでホテルへ向かった。（中略）

「冬の雪はどうですか？」

「雪？雪はたいしたことないねえ。しかし、情緒はタップリだ。なんといっても、中央アルプス、北アルプスの山々がよく眺められるのが、若い人向きでいいや…」

「どんな山岳（やま）が見られますの？」

「槍、穂高、常念、大天井、燕岳も、天気の良い日には見えるしね。あのホテルならもっと多くの山脈が目にはいるかもしれない…。それに、花も鳥も素晴らしい」

「花はどんな？」

友佳理は、楽しくなって、運転手に訊いた。

「そう、女の子には、高ボッチのレンゲツツジやスズランがいいし、この辺には有名な松虫草もある。お嬢さんは、松虫草を知っていますか？」

（中略）

牧は素知らぬフリで、料理の注文を始めた。飲み物は、この地方の特産であるワインにした。このワインは、主に名古屋方面に出荷されている。

ワイングラスで、白ワインが美しく輝いて揺れた。

「二人の幸福のために！」（中略）

---

斎藤 栄

推理作家。東京都生まれ。（1933- ）

高校時代は石原慎太郎らと同人誌を発行していました。東京大学法学部卒業後、横浜市役所に勤務しながら小説を書き続けました。



# 特急「あずさ」殺人事件

## 峰隆一郎

多摩川大学の学生、五貫倫子（いぬきみちこ）は午前 10 時発の松本行き「あずさ」に乗った。しかし車中で…。飲んでいた缶コーヒーに毒が入っていたらしい。倫子の親友は塩尻で勤めていた。

松本から塩尻まで、各駅停車の電車で、二十分足らずで着く。駅から十分ほど歩いたところに、塩尻マーケットがある。倫子の親友だった早坂千秋は、この店で働いている。（中略）

吾郎は、もう一度並んだ。  
「あなたが、喋りたくないのはわかります」  
「わかりました。その先の『かとう』という喫茶店で待っていて下さい。あと一時間ほどで出られますから」  
塩尻には見るようなところもない。町の中をぶらぶら歩き、喫茶「かとう」に、入った。（中略）

峰隆一郎

小説家。長崎県生まれ。（1931-2000）

日本大学中退。出版社勤務を経てフリーライターになります。

# 諏訪湖殺人事件

## 津村秀介

正月二日、諏訪湖畔で死体が発見される。妻殺しの容疑で指名手配中の永沢洋三だった。『週間広場』記者浦上伸介は、永沢の行きつけのスナックへ聞き込みに行く。そこで、永沢と関根由貴との関係を知る…

「先輩、中央本線は、新宿と同時に名古屋へも通じています」  
「貸してみろ。オレが当てる」  
谷田は時刻表を引たくるようにした。  
谷田は索引地図とダイヤを対比させながら、チェックしていった。  
小淵沢発 十四時九分  
塩尻着 十四時四十六分 L 特急“あずさ 19号”  
塩尻発 十五時九分  
名古屋着 十七時二十二分 L 特急“しなの 12号”

津村秀介

小説家。神奈川県生まれ。（1933- 2000）

編集者、新聞社勤務を経て文筆業専業となります。





# 松本発あずさ殺意の信濃路

草川 隆

6月6日、あずさ76号の洗面所に死体が発見される。また、6月10日東京赤坂で男性の死体が見つかるが、洋品店の経理部長、児玉とわかる。塩尻に嫁いだ娘の出産のお祝いに行くと出かけたらしい…

松本盆地の南端にある塩尻市はその名の通り、かつて表・裏日本からの塩の輸送の末端に当たっていた。

また中山道と北国両街道の分岐の宿場町としても栄えたところであったが、今は県下一のブドウの産地として知られている。だが、駅前のたたずまいは、ごくオーソドックスな地方都市で、かつてのこの地の特殊性を示すものはなかった。駅前から始まる中心商店街に入っても古山と未知の印象は変わらなかった。

児玉の娘が嫁いだ田村医院は、この商店街の外れにあった。（中略）

草川隆

小説家。東京都生まれ。（1935-）

国学院大学卒業。1967年SF小説「時の呼ぶ声」を刊行以来、文筆業に専念します。

# 木曾街道殺意の旅

西村 京太郎

木曾福島宿の旅館「はたや」から手紙が送られてきた。また、名物刑事と言われた奥田が福島宿で失踪し、実在しない奥田の娘から捜索依頼の手紙が届く。そんな時、奥田の妻が不審な焼死を…

中央自動車道を、伊那インターチェンジで出て、国道361号線に入った。この道は、昔、米の道と呼ばれたと、観光案内には出ている。

江戸時代、伊那の米を、木曾へ運ぶために、作られた道だからで、そのとき、道を作るのに尽力した古畑権兵衛の名前をとって、権兵衛峠とも、呼ばれていた。

車が、通れるようになったのは、最近らしい。今では、伊那と木曾路の奈良井の間で、一部だが、バスも通っているとわかった。（中略）



西村京太郎

小説家。(1930- )

東京都立工業高等専門学校卒業後、人事院に就職。私立探偵、警備員を経て作家活動を始める。トラベルミステリーの第一人者で、多くの作品がTVドラマ化しています。

▲▼▲ 図書館は友だち・いつでも・どこでも・誰にでも ▲▼▲

参考資料（塩尻市立図書館でお借りしました。）

- ・ 「淡雪の木曾路殺人事件」梶龍雄 中央公論社
- ・ 「信濃路殺人事件」斎藤栄 廣済堂出版
- ・ 「特急あずさ殺人事件」峰隆一郎 大陸文庫
- ・ 「諏訪湖殺人事件」津村秀介 光文社
- ・ 「松本発あずさ殺意の信濃路」草川隆 青樹社
- ・ 「木曾街道殺意の旅」西村京太郎 中央公論社